

## 学位論文の要旨

論文題目 日本「あし文化」に関する多角的研究

広島大学大学院総合科学研究科  
総合科学専攻  
学生番号 D095623  
氏名 栗山 緑

### 論文の要旨

本研究は、ヒトの「からだ」を文化の表象体とする見地から、日本人の「あし」の文化性を多角的に追究し、それを「あし文化」と呼んで論考したものである。

第一章では、日本人の「あし」の形態的特徴について論じる。そのうち、科学的に証明された特徴とそうでないものがあり、科学的な分析がなされていないものについては、その特徴に関連した文化的事象を取り上げて考察する。

第二章では、一般的日本人の「あし」が展開する「歩容」について考察する。ヒトの歩行は、生理学的には「自然歩行」と「特殊歩行」に大別されている。本章においては、意識しないで自然に歩いている状態としての「自然歩行」の中の、特異な歩行形態である、いわゆる「癖歩行」を検討対象とする。

日本人の「自然歩行」の特徴については、江戸時代の庶民の歩容に精髓した谷釜尋徳(2008)の研究を参考資料とした。その分析結果から導き出された幕末から明治初期の日本人の主な歩行形態は、足を引き摺って歩く(「引き摺り足」)、「内股歩行」、「小股歩行」、「つま先歩行」であった。そこでこれら四つの歩行形態と、現代日本人(20世紀)の歩行形態として、生理学的および社会学的な分析に基づいた研究結果から名付けられた「急か急か歩行」(足早歩行)について検討を加える。

第三章では、日本人の「坐」について論じる。その際、(1)日本人にとって「坐」とは何かを、(2)「坐」の多様な形態、(3)「坐」に深く関わる「膝」の役割の三点から、「坐」を考える。

以上、三つの章において、日本人の「あし」の形態的及び機能的な論考を総括していく。

第四章では、「あし」の言語的分析を行う。その第一として、「ことば」からみる日本人の身体認識について分析する。「ことば」からみる日本人の身体認識は、大まかであると指摘されることが多いが、その要因に関する先行研究を参照する。

さらに、「パンの耳」や「うどんの腰」に代表される独特な身体認識についての検討を加える。『日本国語大辞典』を主たる参考文献として、体の部位名称のもつ複合的な意味と、それらが初出する文献の時期を探り、該当する語彙の歴史的変遷を考究する。

そして次に、「腹がたつ」、「肩身がせまい」など「からだ」の部位名称を使った比喻表現である身体語彙(「からだことば」)をとりあげ、言語的分析を加える(本研究における言語的分析というのは、「言語学」といった専門領域ではなく、「ことば」を題材とした一般的な分析方法という意味である)。

日本語の「からだことば」は、「からだ」のすべての部位(名称)に存在するうえ、その数は他に類をみないほど豊富にあると言われている。

この豊富に存在する「からだことば」を考察材料とすることは、「ことば」に反映された日本人の「からだ」に対する考えを見据え、これは「からだ」を文化の表象体とする本研究の視座に沿った有効な研究方法である。

研究資料としては、「からだことば」を初めて編集収録した『からだことば辞典』(東郷吉男編、2003)を採用する。それは、「たとえことば」の用法を重点的にとりあげられたもの

で、その収録語彙数が約 6000 語に及んでいる。また、ことわざと慣用句のなかに「あし」という語が使われている語彙を渉猟し、先人の知恵や教訓、諷刺のなかの「あし」の文化性を追究したい。

また、『動植物ことば辞典』（東郷吉男・上野信太郎著、2006）と『動植物ことわざ辞典』（高橋秀治著、1997）も参考資料とする。『動植物ことば辞典』には、犬・猫・馬や桜・松・竹など身のまわりの動物と植物からつくられた多彩な語彙 2830 語が収録されており、日本人が身近な動植物をどのようにとらえてきたか、その言語生活の一端がわかる貴重な文献である。

一方、『動植物ことわざ辞典』には、動物 174 種、2050 項目、植物 130 種、850 項目、類句を合わせて 3200 項目のことわざが収録されており、本論文の研究手法にとっても有効な文献である。

そして、現代日本人の感覚が反映された「ことば」として、「俗語」のなかの「あし」の分析を行う。俗語研究の第一人者である米川明彦の『若者ことば辞典』、『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』、『現代若者ことば考』、『日本俗語大辞典』と昭和後期から平成初期の『現代用語の基礎知識』を参照する。

また、日本人の歩き方・走り方の表現としての「歩容名称」の考察も加え、第二章で展開した歩容に関する議論をさらに深めたい。その蒐集に際しては、「歩」・「走」・「足」を使った歩容名称を二つの漢和辞典と『広辞苑』を参考文献とする。以上をもって、第四章の言語的視座における「あし」の研究とする。

第五章では、日本人が一般的に「あし」を汚きものとみなす感覚を、日本人の衛生観との関連の中で分析する。文化人類学者の大貫恵美子の『日本人の病気観 - 象徴人類学的考察 -』（1985）に述べられている日本人の衛生感覚を参照しながら、議論を深める。

そして、日本人のもつ「汚いあし」といった否定的な概念のなかで、「踏む」ということとの原義について漢和辞典を参照する。それとは対照的に、日本人の一般認識としての「汚いあし」という概念とは相容れない事象が幾多も存在することについても論じたい。

それは、「汚いあし」と最も清潔であるべき「食べ物」とを同等に扱う「餅踏み」儀式（幼児が餅を踏んで一歳の誕生日を祝う）や「足踏み製法」（餛飩や素麺などのコシを出すために生地を足で踏んで行う）などの事象である。

さらに、日本人の「あし」の概念のなかで最も独自性の強い「あしのない幽霊」についても考察を試みる。日本の幽霊には「あし」がないことについての諸説を概観し、日本人の衛生観と照らし合わせた論考を進める。

そして、他文化圏での「あし」の概念の一例として、近年出版されたキャロル・リンツラー女史 (Rinzler, Ann Carol) による『LEONARDO'S FOOT: How 10 toes, 52 bones, and 66 muscles SHAPED THE HUMAN WORLD』（2013）を概観する。本著には、欧米社会における「あし」の概念について詳細な議論がなされており、本研究の重要課題である比較研究資料として貴重な参考文献となる。

第六章においては、日本人の「あし」と履物の関係について論考する。「あし」には必需品である履物だが、日本には独自の履物着脱の慣習があり、それは日本人の衛生観と密接に関係したものである。

この履物の着脱には、それを専門とする役職やその作法、さらには着脱に関する慣用句・ことわざ・昔話が存在するように、日本には履物着脱に関する独自の文化が存在している。それぞれを分析することによって、履物に投影された日本の「あし文化」の多様性を探ることができる。

最終章においては、日本の「あし文化」について包括的議論を展開する。ヒトの「からだ」を文化的表象体という視座でみる日本人の「からだ」には、「あし」が多様な文化形成の立役者として働いている。しかし、今日に至るまでその功績に十分な光があてられることはなかった。その証拠に、「手の日本人」や「手の国」と、四足の脚のうち前方に位置していた前脚であった「手」の役割だけが大きく評価されている。

日本人の「あし」に対する消極的評価には根が深いものがあるにしても、全く「あし」の功績が認められてこなかったわけではない。実際に、日本人の「あし」のもつ個々の文化性についての卓越する先行研究はあまた存在する。

ただ問題は、それらを「あし文化」として総括的にとらえる視座が欠落していたことである。終章では本研究の総括と自己評価を論述し、日本の「あし文化」再構築に向けた積極的提言をもって全体を括る所存である。